

(六) 國分寺

福山市神辺町下御領

國分寺は山号を唐尾山（からおさん）と称する真言宗大覚寺派の寺院である。



詩碑 聯句戯贈如實上人



如實上人墓碑

一 國分寺の縁起

福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ

神辺の寺院より抜粋

天平十三（七四一）年、聖武天皇が発した国分寺建立詔（みことのり）により、鎮護国家を説く「金光明最勝王経」に基づいて国家の平安を祈念し、全国六十六州の国ごとに建立された官寺です。正式名称を「金光明四天王護國之寺」といい、奈良の大仏で有名な「東大寺」を総國分寺としていました。

「備後國分寺」は、天文七（一五三八）年、大内氏と山名氏による神辺城合戦で戦火を受け焼失。天文十九（一五五〇）年に神辺城主・杉原理興（すぎはら ただおき）によって本堂が再建されました。しかし、延宝元（一六七三）年、大原池の決壊による堂々川の氾濫で諸堂は壊滅し、寺観は荒廃してしまいます。元禄七（一六九四）年、第四代福山藩主・水野勝種（みずのかつたね）が大旦那となり、金穀（金銭と穀物）および川北村の網付（あみつけ、現在の川北帰り）より木材を給付し、今後の災害を避けるため元の場所より北側の山寄せに本堂を再々建しました。この時一五二〇人も的人员を動員したといわれています。その後、元禄十（一六九七）年に客殿が完成し、元文五（一七四一）年には仁王門が建立されました。

発掘調査によれば、創建時は東西約百八十mの寺域（南北は不明）で、古代山陽道に面して南門があり、それを入ると東に塔、西に金堂（こんどう＝本尊を安置する仏、北に講堂（僧侶が經典の講義や説教をする堂）を配置する法起寺（ほつきじ）式伽藍（がらん）配置であったことがわかっています。

※備後國分寺の塔におさめられていたと伝わる「紫紙金字（ししきんじ）金光明最勝王経」は、現在国宝の指定を受け、奈良国立博物館蔵となっています。

「福山志料」には

唐尾山眞言宗年代久シク興敗シハハニシテ小地トナリ今明王院ノ末寺トナルイツノ頃イカナル故ト云コトヲ知ラス由緒書ニ云杉原力時安那郡一郡ニ賦シテ修覆セシメ二十貫ノ地ヲ附シ香火ヲ資ク其後福島力時莊園コトタク取上ラレ延寶庚丑ノ洪水ニ流レ草堂ワツカ一字ノコレリ水野勝種侯神邊網付山ノ材ヲ賜ハリ杉原力舊例ヲ用ヒ郡中ノ縁ヲ募テ修覆ヲ加ヘシメ延寶巳（原文のまま）未ニ成就ス云云

古代、東福院から国分寺のある湯野から御領にかけて安那郡の中心として栄えた地域である。兵火や洪水に遭いかつての面影はないが、茶山の詩を通して当時を想いたい。

二 茶山と如實上人・国分寺

茶山は国分寺を度々訪れている。国分寺や御領山等への「登高」の詩もある。茶山と如實上人の動きを茶山略年表（菅茶山記念館発行）や菅茶山（富士川英郎著）等から拾ってみる。

年号	西暦	茶山の動静
安永七年	一七七八	9/9 桑田元厚・霊昌上人と研山に登る（遊研岩記）
天明四年	一七八四	3/20 西山拙齋・恥庵（弟）と国分寺如實上人を訪ねる
天明六年	一七八六	2/22 友人や枕雲上人と国分寺に遊ぶ
天明七年	一七七八	3/28 西山拙齋・西山考拘・志村東嶼と国分寺に遊ぶ 春 牛海・茂原祥三・菅波惟文と国分寺に遊ぶ
天明八年	一七八八	6/10 菅波武十郎・牛海・如實上人・神野光顕・河相君推ら出席の福山藤井忠之の詩会に招かれる
寛政二年	一七九〇	2/26 西山拙齋と国分寺の招きに行く
享保三年	一八〇三	2/7 宣（妻）千代（妹）敬（千代の子・萬年の妻）と国分寺に遊ぶ
文化十年	一八一三	10/12 頼春風・片雲上人・塾生等と国分寺に遊ぶ
文政三年	一八二〇	9/9 風林上人・小野泉藏及び塾生と蓼々潤に登高し雷雨に値いて国分寺に入る。

右の表の人物を紹介すると

桑田元厚	備後福田の人
霊昌上人	光蓮寺住職。名は風霊、号は南涯。宗派論争により京都で没する
西山拙齋	備中鴨方の人、「欽塾」を開く。茶山と同門で交友は生涯続く。公的な役には付かず
西山孝恂	西山拙齋の次男で儒者。復軒と号す。
枕雲上人	備後府中の人。浄土真宗の僧で詩が巧み。弟恥庵とも交流があった。
志村東嶼	仙台藩儒官。昌平覺で経を講じたこともある
牛海上人	真言宗三寶院派の修験者。詩・俳句を嗜み、茶山と早くから識りあう。
茂原祥三	通称兵右衛門。祥三は字。湯野村の医師の子として生まれる。後同村の里正。
菅波惟文	三日市尾道屋六代目当主。備中久代村大月氏から養子に入る。
菅波武十郎	本荘屋菅波家（東本陣）第6代当主。茶山の本家筋にあたる。茶山の弟子・友。為替問屋帯屋当主。通称利右衛門。号は聴松軒。俳句、和歌を善とする。
神野光顕	西中条の庄屋で大富豪。客殿に十勝碑林という庭園を造る。茶山も再三訪問する。
河相君推	竹原の人、医者。頼三兄弟（春水・杏坪）の一人。山陽の叔父。
頼春風	枕雲上人の弟で僧侶。茶山と詩文の交わりがある。
片雲上人	字は快行 風林は号。讃岐の人。倉敷の観龍寺の住職。詩文の嗜みが深い
風林上人	備中長尾村の人。招月と号す。西山拙齋・茶山・頼山陽に学ぶ
小野泉藏	質屋今津屋当主。隠居号辛。俳句、和歌を善とする。
藤井忠之	

三 如實上人について（ ? ～一八二一）

茶山と国分寺について語るとき、如實上人との関係に触れなければならない。しかし、如實上人については詳しくはわからない。紀州高野山の顕生院から国分寺に転任。和歌を嗜んだり花を愛でるなどの風流人であり、茶山もよく国分寺を訪ねている。「福山志料」に次のようにある。

今按ニ今ノ方丈ニ王門先住如実上人コレヲ建テ少シク寺刹ノカタチヲ成トイエトモ昔ノ二十分之一ニモノラス此寺諸國ニアリ由來開基ノ事ハ云コトヲマタス令義解類聚國史類聚三代格等ニ見エタル國分寺及定額寺ノ條ヲ引テ當時ノ光景ヲ想ヒ見セシム如實ハ紀州ノ産和歌ヲ好ミ花草ヲ愛シテ無欲ナル僧ナリ西山拙齋ト善シ拙齋カ贈リシ聯句ニ唯愛名花不愛錢ト云句アリ其人想フヘシ國分ニ寺ノコト別ニ辨説アリ

鴨方の西山拙齋と気があつたとも特記している。国分寺境内に上人の墓碑がある。

四 茶山と如實上人・国分寺

聯句戲贈如實上人

黄葉夕陽村舎詩 前編 卷二

聯句（れんく）戲（たわむ）れに如實上人に贈る

上人好事爲花顛	上人好事（こうず）花のために顛（てん）す
唯愛名花不愛錢	ただ名花を愛して錢を愛さず
爲是年年購奇種	是れ年々（ねんねん）奇種を購（あがな）う為に
下山時乞衆生縁	山を下つて時に乞う衆生（しゅじょう）の縁
晋師	

顛（かさ）かささま、かささまにする

（大意） 上人は好事家で、花のためには逆立ちしても惜しくはない。ただ、立派な花を愛して、錢には愛着がない。だから、毎年花の奇種を購うために山から下りて（寺から里に出て）衆生に時々錢（お布施）を乞われる

* 聯句とは

七言絶句の二八文字の詩を複数の人がわけて読む作詩法。この詩は起句・承句を西山拙齋、転句と結句を茶山先生が詠んでいる。漢詩の世界ではこんなことをして楽しんだのです。

菅茶山和歌「訪ひ寄れば」

「如實上人を訪ひ侍（はべ）りし日 庭の草花盛りなりしかば」
訪ひ寄れば袖も色濃くなりなりにけり 籬の露の萩の花摺り

籬（まがき） 垣根

（大意） 国分寺へ如實上人を訪ねれば、着物の袖が色濃くなるほど草花は真つ盛り。萩の花が映り込んだ垣根の露で着物を染めてしまいたいそうだ

○ 茶山は塾生、詩友や客人ともに度々国分寺を訪れている。さらに国分寺裏山に登って詩を詠んでいる。その時「中宿り」（休憩）するのが国分寺であった。八丈岩に登り「御領山大石歌」の詩を作った際も立ち寄ったのであろうか。友人たちと訪れた時の詩を紹介する。

同諸友人及枕雲上人遊國分寺即事

黄葉夕陽村舎詩

前編

卷三

諸友人及び枕雲上人とともに国分寺に遊び即事

魚亦知人意

魚亦（また）人意を知る

空遊恬不驚

空遊すれど 恬（てん）して驚かず

摇摇池影麗

摇摇として 池影麗し

曖曖野烟横

曖曖（あいあい）として 野烟横わる

午寺殘梅氣

午寺 殘梅の氣

春林乳雀聲

春林 乳雀の聲

逍遙各相得

逍遙として 各（おのおの）相得す

粗識浴沂情

粗識 浴沂（よくき）の情

恬

平気でいるさま。 摇摇 ゆれ動くさま。 曖曖 おぼろげなさま。 乳雀 雀の子。

逍遙

俗事を離れて気ままに歩くこと。 沂 ほとり、ふち

（大意）

池の魚も我々の心がわかるのか、驚かずに平気で悠然と泳いでいる。水面に映った影が美しく揺れ動き、おぼろげにかすんだ春霞が野にたなびいている。真昼の寺では散り残った梅が香り、木立では子雀の声が聞こえる。すべてが按配よくできていてこういう所をぶらぶらと散歩すると、名利を忘れた優閑の気分というものがわかるって来る。

同海道士及び祥三惟文夜至自唐尾山集

黄葉夕陽村舎詩

前編

卷三

海道士及び祥三惟文と共に夜唐尾山の集いより至る

春山終日遊

春山に 終日遊ぶ

談話非塵世

談話すること 塵世（じんせい）にあらず

登石聽幽潺

石を登り 幽潺（ゆうせん）を聞く

徘徊澗沙際

徘徊す澗沙（かんしゃ）の際

林風吹躑躅

林風 躑躅に吹き

紛紅滿眇睨

紛紅 眇睨（べんげい）に満つ

夜橋衝甚雨

夜橋 甚雨を衝（つ）く

到家門已閉

家に到らば 門已（すで）に閉まる

兒童諫相迎

兒童諫いで 相迎える

肅客立庭砌

客 肅（うやま）いて庭砌（ていせい）に立つ

爐鳴茶靄斜

炉鳴り 茶靄（ちゃあい）斜なり

簾捲燈火細

簾（すだれ）を捲（ま）けば 燈火細し

蓑衣未遽脱

蓑衣（さいい） 未だ遽（にわか）に脱がず

花香在短袂

花香 短袂（たんべい）に在り

塵世 俗世間。

潺

水のさらさら流れるさま。

眇睨

横目にみえる

甚雨

ひどく降

る雨。

肅 寒さのために縮む

庭砌

庭の石だたみ

蓑衣

みの、昔の雨具

袂

たもと、そで

（情景）春のある晴れた日、国分寺の裏山に登っている。岩山をよじ登り谷川のせせらぎを聞き、

咲き乱れる躑躅を堪能して、国分寺にたちより楽しい時間を過ごした。帰る頃にはすっか

り夜になりわか雨にあう。やっと、家につくと門が締まっている。弟子たちが急いで迎えようとするが、みんなは庭で寒さに震えている。炉に置かれた釜からお茶の匂いが漂ってくる。袂から躑躅のいい香りがするのだから急いで蓑を脱ぐことはない。夜遅く帰ったら、すでに門が閉められていた。寒いのを我慢して「花香在短袂」と強がっています。

九日與二客及諸子遊蓼々澗值雷雨入國分寺晴後再入澗飲石上分得韻文

黄葉夕陽村舍詩 後編 卷八

九日二客及諸子と蓼々澗（とうとうかん）に遊び 雷雨に値（あ）い國分寺に入る
晴後再び澗に入り石上に飲す 分ちて文の韻を得る

檐聲纔斷未開雲 檐聲（えんせい）纔（わす）かに断えて 未だ雲を開かず
且犯餘飛入翠氛 且（しばら）く余飛を犯して翠氛（すいふん）に入る
俄頃夕陽呈明媚 俄頃（がけい）に夕陽 明媚（めいび）を呈し
攀林弄水客幾群 林を攀（よ）じ 水を弄（ろう）す 客幾群ぞ
登高候晴還此厄 登高 晴を候（うかが）つて還（ま）た此の厄（わざわい）あるも
亦喜山野屢改觀 亦た喜ぶ 山野の屢（しばしば）觀るを改むるを
歸鞋後先踏月光 歸鞋（きあい） 後先して月光を踏み
人影在沙沙路長 人影 沙在りて 沙路長し
避雷入寺歡較損 雷を避けて寺に入る歡較（やや）損するも
此遊終非惡重陽 此の遊 終（つい）に惡重陽に非ず

檐聲 檐はひさし、檐聲で雨だれの音 余飛 まだ降りやんでいないさま 氛 悪い気
俄頃 またたく間 鞋 わらじ、帰鞋で帰り道

*文政三年九月九日、風牀上人、小野泉藏や北條霞亭・廉塾の塾生達と御領山に登高。蓼々澗（堂々川）にそって登ったのであろう。しかし、雷雨にあつて國分寺にその難を避けたらしい。にわか雨が止んだので、また登ったのであるが、帰る頃には陽が沈んでしまい月明かりのもと下山したようである。大変な登高となった。しかし「此遊終非惡重陽」と強がっている茶山の姿が想像できる。

同行した風牀上人も次のような詩を遺しており、その時の状況がよくわかる。

重陽同茶山霞亭先生及小野仙藏諸氏登御領山午時雷雨急避國分寺分韻得五歌

殷雷驅雨雨翻河 殷雷（いんらい） 雨を駆つて 雨河を翻（ひるがえ）す
避雨俄然蕭寺過 雨を避けて俄然 蕭寺に過（よ）ぎる
先倒酒瓢拌酩酊 先ず酒瓢（しゅひょう）を倒して酩酊を拌（わか）ち
且鬪詩韻費吟哦 且（しばら）く 詩韻を鬪（たたか）わせて吟哦（ぎんが）を費す
籬沾菊蕊傳香遠 籬（まがき）沾（うるお）いて 菊蕊（きくずい） 香を伝うること遠く
溪漲泉聲激石多 溪漲（みなぎ）りて 泉聲 石に激すること多し
再欲登高盡餘興 再び登高して余興を尽さんと欲すれど
西山已耐夕陽何 西山已（すで）に夕陽を耐えるを何（いか）んせん

殷雷 さかんに鳴り響く雷 蕭 ひっそりとしたさま、蕭寺で國分寺 酒瓢 酒の入った瓢箪 吟哦 詩歌をうたうこと 藥 おしべ、めしべ 漲 満ちあふれる

壬寅仲春國分精舎

西山拙齋 書

月色朧々樹色蒼

月色 朧々(ろうろう) 樹色は蒼(あお)し

春陰投宿老僧房

春陰 投宿 老僧の房(ぼう)

過清□□飛泉響

(□は判別できず)

洗盡人間塵土腸

洗い尽くさん人間(じんかん) 塵土(じんど)の腸(ちよう)

又

嵐色籠山色

嵐色(らんしょく) 山色に籠(こ)もり

泉聲雜雨聲

泉声は雜雨(ざつう)の聲

苛留何用懇

苛留(かりゆう) 何ぞ懇(ねんご)ろに用いん

泥濘阻遊程

泥濘(でいねい) 遊程を阻(はば)む

春陰 春かすみ。

人間 俗世間。

塵土 けがれた世。

腸 ころろ。

嵐 山のもや

苛 きびしい、きつい

泥濘 どろみち

*この書は「壬寅仲春國分精舎」とあるので、天明二年(一七八九)の詩であることがわかる。

頼山陽も短い廉塾滞在中に国分寺を訪れ、次のような詩を遺している

<p>國分寺</p> <p>廢寺國分寺 依稀舊般若 斜陽門外蹊 修得千年瓦</p>	<p>頼山陽</p>
---	------------

参考文献

- | | |
|-------------|-----------------|
| 菅茶山略年表 | 菅茶山記念館 |
| 菅茶山 上・下 | 富士川英郎 |
| 福山志料 | 芸備郷土誌刊行会 |
| 神辺の寺院 | 神辺歴史民俗資料館ホームページ |
| 菅茶山とゆかりの人々 | 菅茶山記念館 |
| 頼山陽詩集 | 図書刊行会 |
| 黄葉夕陽村舎詩 復刻版 | 児島書店 |